

甲賀市の文化財⑱

甲賀の祇園行事を繙く

文化・自然へのとびら

今年度、甲賀の夏を彩る風物詩「甲賀の祇園花行事」の映像記録の作成を行いました。

市内16箇所に伝わる祇園祭には、地域で苦心を重ねながら、様々な花づくりが行われてきました。

祇園花は多くの場合、購入したりする地域も見られますが、その中でも、信楽町多羅尾里宮神社に伝わる祇園祭の花は、祭りの約2か月前から組の集議所に集まり地域の人が丹精込めて花づくりが行われています。

この花づくりは、花びらを絞る作業や染める技法、花びらを何重にも張り重ねて花らしく見せるようにするには多羅尾地域ならではの歴史と伝統に培われた技の数々が伝わっています。

こうした秘伝の技の数々を今回の映像記録の事業と合わせて、「祇園花づくり体験」と「祇園燈籠づくり体験」を行いました。

まず多羅尾地域の花には数種類の花が作られますが、中でも牡丹に見立てられる一本花の花づくりはその基本となるものです。

花びらの型紙を障子紙に写しとり、花びらを切り、それを染料で染め、七分程度に乾いたら手ぬぐいを使って花弁を表現する絞りを入れて花びら状に仕上げていきます。この絞りを入れるには、熟練

した技術が必要だと言われています。

花びらには、すべて根元に切れ

込みが入っていて、これによって花びらを糊付けした時、内側に向けて花びららしく形が整うのです。

花びらの糊付けの時に注意を払うのが、各段ごとに花びらを互いに貼り付けること、そして花びらの先端の高さを揃えることにより美しいバランスのとれた花になるといいます。

また祇園の燈籠といえば、「大原祇園」が有名で、踊り子の頭上にのせた燈籠を激しくぶつけ合い、破壊する行事を思い浮かべますが、稗谷の燈籠は宵宮に津島神社の境内でほのかな燈明の光で透かし燈籠を見ながら楽しむもので、「風流」の面影を漂わせています。この透かし絵づくりに若衆たちの力によって、趣向を凝らした図柄の下絵からナイフで透かし絵を仕上げていくのです。

いずれの伝統文化も地域の方々の手づくりによって大切に受け継がれ守られているのです。それだけ、この祇園祭にかける熱意と意気込みが伝わってきます。

「問い合わせ」
文化財保護課

☎ 86-8026
FAX 86-8380

焦る武士、廻状を走らす

江戸時代の街道では実に様々な事件がおりましたが、今回は武士の道中の些細とも言える事件を水口町の川嶋善興門家文書から取り上げてみましょう。主人公は肥後藩士嶋田俊兵衛。彼は、肥後熊本細川家の藩士名簿しまたとしべえに同姓の家が見え、その一族かと思われるのみで役職などは明らかではありません。そんな俊兵衛の名は、彼が仕事上の不始末を起こしたことで史料に記されることとなります。少しその様子を見てみましょう。

俊兵衛は水口から石部への道中、馬に括り付けてあった手行李てこつりを落としました。それは蛇の目紋とともにご丁寧に「肥後嶋田」と染め抜いた布で包まれ、白木造りの状箱が入っていました。中身は恐らく細川家江戸藩邸で拝領した書類であったと思われます。

今のように簡単に控えを作れない時代のこと、俊兵衛は「ともかく大切な書類」と、焦った表現をしています。余程大

市史の小徑

第18回

街道を歩く
その8

事であったと見えて、自身は石部とつゆで逗留し、石部から水口までの街道沿いの九ヶ村あてに、「拾った者がいればすぐ知らせよ」と朝の10時に速達廻状を出しています。しかし、廻状が回りきるのに10時間もかかっており、俊兵衛と村との温度差が見えるのが面白いところです。

話の結末は残念ながら不明ですが、今から見ると些細に見える事件から、

「焦る武士」と村々の反応という街道の日常風景の一端を垣間見ることができるのです。



『東海道名所図絵』

【問い合わせ】総務課市史編纂係
☎ 86-8075 FAX 86-8380